

ジュラーヴリ

ЖУРАВЛЬ



～チェルノブイリとフクシマを結んで～
「救援関西」発足**28**周年の集い

2019年 12月15日(日) 午後1:30～4:30

大阪市立総合生涯学習センター／第1研修室

(大阪駅前第2ビル5階)

プログラム

1. <事務局報告> 今年取り組みを振り返り 来年に向けて

～チェルノブイリ被災地訪問報告も～

2. <お話し> 佐藤健太さん 福島県飯舘村 村議会議員

全村避難を強いられた村

～飯舘村の8年とこれから～

3. 質疑応答・討論

＊＊救援バザー：購入したてのベラルーシグッズ
おいしい手作りケーキ等

「救援関西」発足から今年で28年を迎えました。これまで一緒に歩いてきて下さった皆さん、ほんとうにありがとうございます。チェルノブイリ被災地では33年経った今も放射能汚染が続き、人々はヒバクの危険、健康被害、生活困難に向き合い続けています。一方、事故から8年半を迎えたフクシマでは、廃炉作業、放射能汚染・廃棄物、健康・医療、賠償・生活再建、等々、課題が山積していますが、政府は「風評払拭・リスクコミュニケーション戦略」を強め、汚染の残る地域にも「帰還ありき」の「復興政策」を押しつけるなど、事故被害をなかったことにしようとしています。

私たちはチェルノブイリとフクシマを結んで、事故被害者の人権と補償、健康と生活を守るために、そしてもうこれ以上原発事故を繰り返さないために活動を続けます。「発足の会」では、福島県飯舘村からゲストをお迎えし、全村避難を強いられた村の現状、村民の思いとこれから…についてお話をお聞きし、現状を知り、理解を深めたいと思います。また私たちの活動を振り返り、フクシマ10年・チェルノブイリ35年を見据えた今後の取り組みについても話し合いたいと思います。ぜひ、ご参加下さい！

福島からのゲスト： 佐藤健太さんのプロフィール



1982年飯舘生まれ、飯舘育ち。2011年3月、原発事故直後から飯舘村の子どもや若者の早期避難を求め、Twitter等で発信を続けた。同年4月22日、「日本一美しい村」と言われた飯舘村は「計画的避難区域」に指定され全村避難となった。「愛する飯舘村を還せ」と思いを同じくする仲間とともに「負けねど飯舘！」を結成し、子どもをはじめ村民の長期的健康管理、補償対策等を求め、「健康生活手帳」（行動・健康記録）作成などにも取り組んだ。

2017年3月末、飯舘村は一部「帰還困難区域」を残して避難解除となったが、未だ村民の75%以上が避難を続けている（2019年10月現在）。2017年9月、健太さんは「村民参加型の村作り」を訴え村会議員に立候補し2位当選。現在、妻と幼い娘二人と共に福島市に居住。飯舘村で父が創業した事業所を引き継ぎ、村外から毎日仕事に通っている。「村の一般会計は復興予算で事故前の4～5倍になったが、村民の合意形成で執行されていない。復興予算は帰還が前提で、村外の住民支援予算はほとんどない。」（今年3月のインタビュー記事より）飯舘村の若い世代として、幼い子を持つ親として、原発被害の続く故郷のこれからを見据え、試行錯誤を続けている。



ミンスクからメッセージ

10月26日～11月2日 チェルノブイリ被災地・代表訪問

皆さんの支援と想いを届け、今後の取り組みについて話し合ってきます

ミンスクの「移住者の会」代表のジャンナさんのお宅で、このメッセージを書いています。昨夜遅くにモスクワから通訳のリュダさんと一緒にミンスクに移動しました。空港では、ジャンナさんが出迎えて下さり、一年ぶりの再会を喜びました。お宅では美味しい手料理を準備して下さっていて、旅の疲れもすっかり癒されました。

今日（10月26日）から11月2日まで、いつものがらのハードスケジュールですが、ベラルーシとロシアの被災地を代表訪問し、日本の皆さんから託された支援カンパ等を届け、交流を続けているチェルノブイリ・ヒバクシャの友人の方々の近況、事故から33年目の被災地の様子を見聞きしてきます。また、「フクシマ10年・チェルノブイリ35年」に向けた、今後の協力した取り組みについても、各地で意見交換してきます。また、来年3月に予定している「チェルノブイリとフクシマを結ぶ旅～第二段・若者交流」（仮称）の準備として、各地で受け入れ・コーディネート依頼の依頼と打合せもしてきたいと考えています。（別記、旅程表をご参照下さい。）

そしてクラスノポリエでは、今年の1月に亡くなられた小児科医のベーラ・ルソーバさんのご家族にもお会いし、ベーラさんのお墓参りもしてきたいと思ひます。長年、チェルノブイリ被災地の子どもたちのために尽くされ、私たちの支援・交流活動を現地で支えてきて下さったベーラさん。私たち皆が、心から愛していたベーラさんのご冥福を祈って、皆さんを代表してお参りしてきたいと思ひます。

今回の訪問報告は、12月15日の「救援関西発足28周年の集い」で事務局報告として行いますので、「集い」にぜひご参加下さい！（振津かつみ）



日程	内容	宿泊
10月25日	モスクワからミンスクへ移動（飛行機）	ミンスク
10月26日	ユダヤ人ゲットー跡見学、「移住者の会」と交流	ミンスク
10月27日	早朝クラスノポリエに向け出発（車）、ベーラさんのご家族を訪問・墓参	クラスノポリエ
10月28日	クラスノポリエの学校・ギムナジウム、幼稚園、障がいを持つ子ども・大人のリハビリセンターなど訪問、夕刻にミンスクに戻る	ミンスク
10月29日	ミンスクの日本文化センター訪問、医科大学訪問、バザー用品買い出し	ミンスク
10月30日	「移住者の会」代表のジャンナさんと話し合い、夕刻にモスクワに戻る、夜行でノボジプコフへ	車中泊
10月31日	朝ノボジプコフ着、ラディミチで話し合い・交流、等	ノボジプコフ
11月1日	ラディミチで話し合い・交流、等、夜行でモスクワへ	車中泊
11月2日	昼前にモスクワ着、松川さんと会う、夕刻の飛行機で日本へ	機中泊
11月3日	帰国	

ノボ・キャンプに参加したクラスノポーリエの子どもの感想文 「おとぎ話のようなノボ・キャンプ～日本の支援者の皆さんありがとう！」

私は初めて子供たちの「国際キャンプ」(ノボ・キャンプ)に参加しました。ノボ・キャンプはとても楽しかったです。

以前に私の姉のベロニカがキャンプに参加した時に、両親と面会に行ったことがありました。その時には、キャンプの子どもたちのコンサートを聴きました。その後、サークル活動がありました。私は母と他の子どもたちの親とともに布人形作りのサークルに参加しました。私はベロニカに、「キャンプの中を案内して」と頼みました。キャンプには、ハンモックがかかっていたり、ブランコがある場所がありました。私はその場所がとても気に入って、いつまでブランコをこいでいました。そして帰る時間がきても「帰りたくない」と泣いていました。私は母に「ここに残りたい」と頼みましたが、まだ年齢が小さかったから、そうすることができませんでした。(訳注：ノボ・キャンプには就学年齢以上の子どもが参加している。)

2018 年の夏、成長した私は、日本の方々の支援のおかげでノボ・キャンプに参加する機会が与えられました。私と友だちは、「第一家族」に配属されました(訳注：キャンプでは、いろんな年齢層の子どもたち約20人がひとつの「家族」のようなグループになって、同じコテージで共同生活をする)。私たちはデニスとタチアーナ(ボランティア・スタッフ)の担当するコンピュータクラブに参加しました。私はタチアーナとカラオケで歌ったり、マイクでいろんなことをしゃべったりもしました。それから、ダンスサークルもあって、頑張って踊りもやってみました。ゲームの時間もあって、ステーションごとに夫々のテーマの遊びが準備されていました。私は「ハリー・ポッター」というゲームに参加しました。そこで「魔法の棒」を作って、その使い方を習得しました。また、ノボ・キャンプではギターの弾き方も学びました。そして、「親の面会日」にコンサートをしました。私たちのグループは、「プクシキ」というアニメのダンスをしました。その他に、「インディアン」仮装ゲームもやり、その中で、バイソン(アメリカ野牛)を捕まえました。

これらのノボ・キャンプでの様々な経験により、この夏は私の短い人生の中で最も印象に残った



夏になりました。私はすでに、このおとぎ話のようなノボ・キャンプで過ごした時間を恋しく思っています。私をこの素晴らしいキャンプに送って下さった、日本の支援者の皆さん、ほんとうにありがとうございました。もし、再びキャンプに参加できる機会があれば、ぜひ行きたいです。

アンジェリカ
クラスノポーリエ
(訳：竹内大樹)

子どもたちに 核も戦争もない 未来を

～戦争はいやや！核なんかいらへん！FESTIVAL2019～

なんとか台風一過、でも置き土産の突風が時々テントを激しく煽る 10 月 13 日（日）、長居公園で今年も《反核フェス》が開催されました。

実行委員会代表の山科さんのご挨拶で開会。「みなさんから元気ももらって、反核の思いを貫いています」とおっしゃる山科さんですが、むしろ私たちが山科さんから元気をいただいています。ある方が山科さんに「おいくつになられました？」と尋ねられ、そばで私が「97 才です」と言うと、「そんなに？ いや、違うでしょう」と繰り返しおっしゃいます。本当ですって！ 各ブースを回って挨拶もされ、始まりから終わりまで、しっかりとみんなの活動を見守ってくださっていました。

《チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西》のブースでは、今年は「おでん」を販売することになり、前日から長沢由美さんが大量に仕込んでくれました。六種盛ということで、注文があると「大根に、ごぼてん、ジャガイモに、玉子と、それから・・・」お鍋の中から選び、盛沢山なお皿をお客さんにお渡しします。おいしいと大好評で、これは「来年に続く」になりそうです。マトリョーシカや木製の鍋敷きなどベラルーシグッズも並べ、フルーツケーキもレギュラー出演。チェルノブイリ被災地に届ける救援へのカンパが減ってきているので、スタッフもリキを入れて販売しました。



ずっと続けてきたことを絶やしてはならないとの気持ちで、関西のおばちゃんパワーを発揮。おかげで収益が例年よりだいぶ増えました。ヤッホ～。そして、恒例のダンスコアポシブルによるバレエ。トラック舞台にはもったいないのですが小谷ちず子さんは「毎年、生徒達が練習した成果を発表するのを楽しみにしています」とおっしゃってくださいます。午後一番にバレエ“平和への祈り”の開幕（って、緞帳はあらへんのです

が）。少女たちが楽しく遊ぶシーンから始まり、兵士の登場によって戦争の勃発が告げられます。少女たちだけでなく兵士も戦争に翻弄され、苦しみながら倒れてしまいます。黒い大きな布に覆われた殺戮と破壊の後に、オリヅルを抱きしめた白衣の精が表れ、平和を希求しツルを羽ばたかせます。舞台から「オリヅルと共に踊りましょう」と呼びかけがあり、ダンサーが見物の場に降りて、みんながいっしょになって踊りました。山科さんも大きなオリヅルを羽ばたかせられます。オリヅルは“平和への祈り”そのもの。会場のたくさんの方々が思いを同じくしています。《反核フェス》にふさわしいバレエをありがとうございました！



やがてお開きの時刻。展示したパネルを片づけながら「ここにも説明に来ればよかった」と、反省。おでん屋さんで結構忙しく、気が廻らなかったのです。誰かやってくれましたか～？ 抜けてたこともありだったけれど、署名もいただけたし、あれこれしながらたくさんの方に出会って、なかなか秋の 1 日でした。

（田中あ）

2019 年ゴー！ゴー！ワクワクキャンプ メディカルチェック

昨年が暑すぎたので、今年は 6 月・7 月と涼しくて安心していたら、8 月 3 日のキャンプ開始日よりしっかり猛暑になり、夏は夏でした。

2011 年から 8 年半。あの年からずっと保養を続けている若い皆さんは今年も京都南丹の古民家でキャンプを開いています。陣中見舞いというか、メディカルチェックで応援に行ってきました。

今年はスタッフの態勢に変化があり、16 日間に短縮しての開催です。頼りっぱなしの中心メンバーが少なくなって不安がありましたが、皆さん、例年通り元気にキャンプを楽しんでおられました。日中暑くても井戸水で冷やしたお茶を飲んでゴロゴロ、夕方はバドミントンをしたり、夜は「人狼ゲーム」「パプリカダンス」でワイワイ、早朝は涼しくて畑を散歩したり。楽しみにしていた村祭りの日が雨でがっかりでしたが、子どもたちの発案でカラオケとビンゴ大会をして、「こっちの方が楽しかった」というくらい盛り上がったそうです。

今年は畳が新しくなり、網戸もきれいになりました。とはいえ古民家。冷房もなく市販のおやつもなくプライバシーもなく（笑）、贅沢とは言えませんが。すっかりくつろいでいる子どもたち&保護者の皆さん。調理を手伝いながら世間話に花が咲きます。

毎年やっぱりゴーワクに来る。・・・やっぱり、(2011 年) 以前とは違う。最初のころゴーワクに来て、移住して、今は京都なのでお手伝いに来ている・・・子どもが「行く」と言う。ここにきて子どもが変わった。あれからいろいろなことがあった・・・直接的な放射能の問題だけでなく、子どもが生きにくいあれこれを考えさせられました。ゴーワクの魅力は、それらも含めて、ふわっと受け止めて自然に居場所を提供してくれているところでしょうか？

今年は、今まで参加したことのある子どもたちのうちの何人かが中学生になり「手伝ってくれる人」の仲間として、大人のミーティングに参加していました。それを見て、6 年・5 年の子どもたちが、「俺は来年だ」「なら再来年か」と、自主的・かつ勝手に大人ミーティング参加を予定（笑）していると聞き、思わずニヤリとしてしまいました。

ハチにさされた事件はありましたが、大きな健康上の問題はなくメディカルチェックは無事終了。何としても応援したくなる、やさしさ筋金入りのゴーワク。中心メンバーの負担を考えさせられる 2019 年でした。 （長沢由美）



映画「40年 紅どうだん咲く村で」

久保きよ子

～嫌われてもかまわない。負け続けても諦めない。原子力村・電源の地に生きる。～



9月16日、シネ・ヌーヴォ Xで上映している松下照幸さんのドキュメンタリー映画をひとりでも多くの人に見てもらいたいと、友達にお声かけをして、都合のついた方々4名と一緒に観てきました。

地下鉄「九条駅」で待ち合わせをしていたら、偶然にも岡崎まゆみ監督に出会いました。

この日会場は満員でした。上映終了後、「森と暮らすどんぐり倶楽部」に、一緒に行った

方々とも再会しました。とても懐かしい再会でした。

私は、試写会にも参加し、今回で2回目の映画鑑賞でしたので、紅どうだんつつじを移植し、愛情をこめて水やりをし、育て上げる姿に感動をしたり、自然災害に襲われながらも一から立ち上げ直す姿の大変さを実感できました。

ドイツを訪問し、再生可能エネルギー（主に風力）を進める活動が続けるドイツから学ぶ姿にも共感を覚えました。木の実のシロップ作りや村祭りを通して地域の人たちとのコミュニケーションを大切にする人柄などなど、しっかりと松下さんの人としての豊かさを再認識できました。

この映画の中で最も衝撃を受けたシーンは、J R美浜町駅前で町長選挙演説をしている場面でした。黒っぽいスーツ姿の関電社員と思われる数十人の人たちが、選挙応援をしている様子は、本当に異様な姿に映りました。演説が終わると、無言のまま去っていく姿に、動員された人たちの哀れさを感じてしまいました。

10月に入って、関西電力の経営陣と高浜町の地元企業との癒着、元助役との金品授受＝贈収賄問題が全国に報道されました。八木会長が辞任し、今後岩根社長も辞任する大問題なのにもかかわらず、10月10日には、何事もなかったかのように大飯4号の営業運転を強行しました。私には、「何が何でも原発を動かしてもうけるんだ！」という関西電力の姿しかうつりません。

今年も10月26日の反原子力デーにちなみ、関西電力に申し入れを行いました。原発がらみの不祥事を起こしていながら、申し入れに一切対応しない、今年も受け取ろうとはしない企業です。

しかし、私たちはあきらめません。チェルノブイリ、フクシマを繰り返さない！ために すべての原発を止めるまで頑張ります。



岡崎まゆみ監督（右から2番目）を囲む

10. 26 反原子力に際しての関西電力への申し入れ

関西電力株式会社取締役社長 岩根 茂樹 様

「事故さえなければ」・チェルノブイリとフクシマ、二つの原発重大事故被害者の共通の願いです。事故により、一人一人のそれまでの普通の生活が一変させられてしまいました。原発はひとたび重大な事故を起こせば、放射能汚染は広範囲・長期にわたり取り返しのつかないこと、そして事故の収束・廃炉作業は困難を極めることを示しています。もうこれ以上重大事故を繰り返してはならず、そのためには脱原発に向かうしかないのである。

フクシマ事故後の高浜原発の再稼働を巡り、貴社役員と高浜町の元助役、地元企業の原発マネーの還流が白日にさらされました。貴社の幹部が約 3.2 億円にも上る巨額の金品を森山氏から受け取り、貴社から原発関連の工事を請け負っていた吉田開発等から受け取ったお金を森山氏がそれに使っていたというものです。発覚のきっかけは金沢国税庁の査察であり、それがなければ隠ぺいされたままでした。査察はフクシマ事故後の 7 年間に限られており、今明らかになっていることは氷山の一角にすぎません。フクシマ事故後に 2 度も電気料金を値上げしておきながら、裏ではこのようなことが実際に繰り返されていたことに、怒りと共に開いた口がふさがりません。辞任を表明せざるを得なかった貴職が記者会見で述べたように、この企業風土は会長と社長が辞任すれば済むものではなく「もう少しその深いもの、歴史的なもの・・・その全貌を徹底的に暴き出す」ことが必要です。そのためには直接の当事者である貴職も、第三者委員会が公正中立な調査が行えるよう、即刻職を辞すべきです。

しかもこの問題の渦中に大飯 4 号機を再稼働させるとはもってのほかであり、怒り心頭です。

一連のことは、原発を作り運転・維持するためには、地元に大量にお金をばらまき、いびつな利権構造を作らなければ不可能だということを実証しています。そして、その上に原発は常に重大事故の危険を抱えています。

これまでも繰り返し申し入れてきましたが、今、貴社の為すべきことは利権にまみれた「原発頼み」の体質から即刻脱却し、再生可能エネルギーへ抜本的に転換することです。そのことが失った信頼を回復し、貴社の生き残る道です。

以下申し入れます。

- ・チェルノブイリ・フクシマを教訓とし、さらに利権にまみれたいびつな構造の上に成り立つ原発すべての運転を中止し、廃炉にしてください。

脱原発から再生可能エネルギーに抜本的に転換し、その普及拡大に協力して下さい。

- ・第三者委員会が公正中立な調査ができるように岩根社長は即刻職を辞してください。
- ・運転中の高浜 3 号機、大飯 3・4 号機の運転を即刻中止してください。
- ・40 年超運転の美浜 3 号機、高浜 1・2 号機の寿命延長を断念し、即刻廃炉にしてください。
- ・使用済み核燃料中間貯蔵施設の立地計画を撤回してください。
- ・原発コストの 2020 年からの託送料金への上乗せは止めてください。

重大事故を前提に人々に被ばくを押しつける ICRP 勧告の撤回を求めます ICRP に「草案」を撤回するようにコメントを送りました

国際放射線防護委員会（ICRP）は「大規模原子力事故における人と環境の放射線防護」の草案のパブコメを募りました。来年刊行物として出版される予定です。この草案では、チェルノブイリとフクシマを教訓に、重大事故が起こった場合の「放射線防護」を事故直後の「緊急時」被ばく状況と線源がコントロールされてからの「現存」被ばく状況に分け、それぞれの被ばく量の目安として「参考レベル」などを勧告しています。これは原発を推進するためには重大事故が起こることを前提に、事故時には、人々に通常運転時の「個人線量限度」よりも大量の被ばくを強いるものであり許せるものではありません。この草案はチェルノブイリ事故後に出された「ICRP2007 年勧告」をベースにしたもので、日本政府は「2007 年勧告」を日本の法律に取り入れていないにもかかわらず、フクシマ事故後、なし崩し的に事故時の「参考レベル」を取り入れた政策を行っています。このような政策は、法律にも反する人権侵害です。今回の ICRP の草案は、このような日本政府の政策に「お墨付き」を与えるものであり、「救援関西」としても被害者の人権を守る立場から、この草案を撤回すべきとのコメントを ICRP に送りました。（詳細は、以下のコメントをご参照下さい。）

ドラフト「大規模原子力事故における人と環境の放射線防護」へのコメント

「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」 振津かつみ

真の「放射線防護」は、重大事故を二度と起こさないように、原子力利用をやめること

私たちは、チェルノブイリ事故 5 年目からチェルノブイリ被災地に入り、毎年、被災地を訪問し、チェルノブイリ事故被害者への支援と交流を 28 年間にわたって行ってきました。チェルノブイリ事故により広大な地域の放射能汚染と多くの人々の被ばくによって、被害者ひとりひとりの人生が一変し、地域社会が様々な困難を強いられてきたこと、重大事故が取り返しのつかない被害を社会と環境にもたらすことを目の当たりにしてきました。その中で、私たちは被災地の人々と協力しながら、被害者の健康と生活を守るために努力してきました。これらの活動の経験を通じて私たちは、被害者とともに、チェルノブイリのような原発重大事故を繰り返してはならないことを学び、そのために原子力利用をやめるべきだと確信し、世界に訴えてきました。

それにもかかわらず原子力を推進する国々や産業は、重大事故が起こることを前提に、原子力利用を続けてきました。そして原子力産業の意向にそって ICRP は、重大事故時には、通常運転時の「線量限度」をはるかに超える被ばくを、労働者と多くの市民に押しつけることを勧告する Publication 103（2007 年勧告）¹⁰⁹,¹¹¹を出しました。そのような原子力政策の結果として、原発重大事故を再びフクシマで招いたのです。

さらに、フクシマ事故の直後に ICRP は、これらの勧告にそった「緊急時と現存被ばく状況の参考レベル」を用いて「放射線防護」策を行うようにとの「声明」を出しました（2011 年 3 月 21 日）。その結果、ICRP が勧告した事故時の「参考レベル」は、日本の法律には未だに導入されていないにもかかわらず、国の事故後対策の「基準」として事実上用いられⁱⁱⁱ、事故を引き起こした加害者である国や東電が、被災地で当然行すべき被ばく防護や被害者への補償を十分に行わないことの根拠のひとつとされてきたのです。

ICRP が、これらの経緯の中で原子力産業に加担した自らの役割に対する反省もなく、未だに重大事故を前提に、欺瞞でしかない「放射線防護」を勧告する本ドラフトを発表したことは、言語道断

です。このような勧告は、チェルノブイリやフクシマの事故被害者の苦しみを蔑ろにし、原発重大事故をさらに繰り返す危険に繋がるものであり、将来世代への犯罪でもあります。真の「放射線防護」は、重大事故を二度と起こさないように、原子力利用をやめることです。

ICRP の「放射線防護」体系は原子力産業の利益を代弁し 核被害者の人権を侵害するもの

本ドラフトの基礎にある ICRP の「放射線防護」体系の考え方^{iv}、「最適化」「正当化」^vは、原子力産業の利益を代弁する「原則」（論理）であり、核被害者の人権を侵害するものです。このような ICRP の考え方を私たちは決して受け入れることはできません。

「正当化」は「放射線被ばくの状態を変化させるいかなる決定も、害より便益を大きくするべきである。」^{vi}というものです。被ばくを伴う行為や被ばくを避けるための対策は、「正味でプラスの利益を生む」ときに「正当化」できるというのですが、ここでの利益とは、事実上、原子力産業の利益のことです。

「最適化」は「被ばくする可能性、被ばくする人の数、及びその人たちの個人線量の大きさは、すべて、経済的及び社会的な要因を考慮して、合理的に達成できる限り低く保たれるべきである。」^{vii}（as low as reasonably achievable: ALARA）というものです。これは、利益と損益を天秤にかけ、被ばく人数や線量が原子力産業の利益を損なわない範囲内にあれば「合理的」とであるとみなし、その範囲内で「低く保つ」べきだということです。

チェルノブイリ事故によって、多くの労働者や市民が、事故直後の高線量被ばく及び、その後の長期にわたる追加被ばくを強いられるという状況が現実になりました。ICRP は、このような状況を追認し、重大事故による被ばくを人々に押し付けながら原子力利用を続けるため、Publication 60(1990 年勧告)では事故後の介入の計画のための追加方針を刊行する計画であると表明し^{viii}、その後の検討を経て^{ix}Publication 103（2007 年勧告）では、「計画被ばく状況」（通常運転時）に、「緊急時被ばく状況」「現存被ばく状況」という「被ばく状況のタイプ」を新たに加え、それぞれに「正当化」「最適化」を適用しました。そして、「緊急」「現存」被ばく状況では、被ばくによる確率的影響（ガン・白血病等の放射線後障害）の量的評価を完全に放棄し、「計画被ばく」の「線量限度」を大幅に上回る目安線量としての「参考レベル」を本格的に導入したのです^x。

ドラフトはフクシマ事故後も人々に被ばくを押しつけ 原発を推進する日本政府の政策を支持するもの

私たちは、フクシマ事故後の2011年4月から、毎月、事故被災地を訪問し、チェルノブイリ事故被災地での経験を伝え、様々な市民や専門家と協力し、被ばく防護、健康相談、空間線量測定、食品・土壤汚染の測定、子どもたちの保養支援、被災地との相互交流、等々にも取り組んできました。広範な領域にわたる、複雑な被災地の事故被害(しかも地震と津波の被害も加わった)の状況も、この8年余、つぶさに見聞きしてきました。「事故さえなければ」「事故前の生活を返してくれ」「自分達のような苦しみは二度と繰り返してほしくない」「原発はもうたくさんだ」「国と東電はちゃんと責任を取れ」という多くの被害者の体験から出た言葉に込められた、切実な現状と思いは、本ドラフトの附属書 Bには全く描かれていません。

現在、日本では、フクシマ事故被害者が加害者である国と東電の責任を問い、人権の回復・確立を求めて様々な闘いに取り組んでいます。そのような中で、ICRPが（しかも日本の委員が中心になって）^{xi}原子力推進の加害者の利害を代弁するこのような勧告を改めて出すのは、極めて意図的で政治

的といわざるを得ません。この勧告が、今後のフクシマ事故被災地の施策にも大きく影響を与え、人々にさらなる被ばくが押しつけられ、さらに次の事故を前提に原発を推進することにお墨付きを与える危険性があると私たちは危惧します。

Publication 111 では「現存被ばく状況」の公衆の「参考レベル」は、「1～20mSv のバンドの下方部分から選択すべき…過去の経験は、長期の事故後の状況における最適化プロセスを拘束するために用いられる代表的な値が 1mSv/年であることを示している…国の当局は、その時点で広く見られる状況を考慮に入れ、また、復旧プログラム全体のタイミングを利用して、状況を徐々に改善するために中間的な参考レベルを採用してもよい」^{xii}とされています。さらに、本ドラフトでは「1mSv のオーダーへの段階的な被ばく低減をめざす」^{xiii}とされています。これらは、公衆の被ばく限度 1mSv/年を重大事故後には「長期目標」^{xiv}に棚上げにし、「1mSv のオーダー」つまり「1mSv 以上 10mSv 未満」の範囲での被ばくを「参考レベル」として人々に押しつけることを意味します。

日本の現行法では「公衆の被ばく線量限度 1mSv/年」が担保されています^{xv}。しかし、フクシマ事故によって、福島県及びその周辺県では約 400 万人にものぼる人々が 1mSv/年を超える追加被ばくを被るという「違法状態」が生じました。これは明らかな法律違反の人権侵害です。人々は当然の権利として、法律で担保されている「公衆の被ばく線量限度 1mSv/年」を遵守すべきであると国や行政に求めています。本ドラフトの「現存被ばく状況」の「参考レベル」の勧告は、このような人々の強い要望を退け、事故による汚染のために実際に住民被ばくが 1mSv/年を超えている地域で必要とされている様々な防護・支援策を、政府や行政が責任持って行わないことを支持するものであり、私たちは容認できません。

ドラフトでは子供や妊婦・胎児の被ばくへの具体的な配慮がされていない

事故被災地の住民は、成人だけではありません。ドラフトにも「放射線学的リスクが他の個人グループよりも大きい可能性がある小児および妊婦に特に注意を払うよう勧告する」等^{xvi}、繰り返し記載されているように、大人と比べて小児と胎児は放射線に対する感受性が高く、また将来の寿命も長いので、同じ線量率でも生涯の総被ばく線量は高くなってしまいます。それにもかかわらず、勧告の「参考レベル」には子どもや妊婦（胎児）に配慮した別の線量レベルがなんら提示されていないのは筋が通りません。

ドラフトは 重大事故による広範な影響を理由に被ばく防護の重要性を相対化し対策を限定している
ドラフトでは、重大事故の影響が、健康、社会、経済、精神的影響、等、広範囲に及んでいるものであることが述べられています^{xvii}。しかし、このような甚大な被害を及ぼした、原子力利用そのものに対する批判や反省が全くみられません。それどころか、被害が様々な領域に広範囲に及んでいることを理由に、その中で放射線被ばくの問題が相対的に小さいことであるかのように捉えて、原子力産業の経済的利益に基づく ALARA の原則に従って「防護策」を限定的なものとしています。^{xviii}そのような視点は被害者の利益とは相容れないものであり、受け入れられません。

ドラフトには 低線量被ばくのリスクを評価する最新の研究が引用されていない

ドラフトでは「最も新しい科学的知見に基づく」としながら^{xix}、低線量被ばくの影響を明らかにした最近の疫学データ（原爆被爆者の寿命調査[LSS]¹⁴ 報,世界の核施設労働者の調査[INWORKS]

やCTによる小児ガンの調査など)^{xx}は引用していません。がんの発生については、2007年勧告での評価から変ることなく「100mSv未満では証拠はそれほど明らかでない」とし、しかも線量線量率係数(DDREF)2を採用して「100mSvで0.5%の過剰発症」としてリスクを過小評価しているのは誤りです。^{xxi}その後の新しいデータも含めて低線量被ばくの影響を正しく評価し、「放射線防護」と被害者の健康管理や支援に活かすべきです。

ドラフトの福島県民調査・甲状腺検査に関する問題

附属書Bでは、福島の県民健康調査の甲状腺検査の結果について、「事故後の被ばく影響である可能性は低い」と述べられています^{xxii}。事故による被ばくと甲状腺ガンとの関係については、未だ評価が十分になされていないにもかかわらず、このような結論を記載するのは間違いです。チェルノブイリでは事故後の2ヶ月間に40万人以上もの人々の甲状腺被ばく線量の実測が行われたにもかかわらず^{xxiii}、福島では事故直後に(浪江町で行われた数十人の測定^{xxiv}以外は)甲状腺被ばく線量の正しい実測がほとんど行わなかった^{xxv}ことも、被ばくの因果関係の評価を困難にしている要因のひとつであることを明記すべきです。

また、低線量でもガンが誘発される可能性は否定できないにもかかわらず、「長期の甲状腺検査調査は、甲状腺線量100-500mGyの被ばくした個人に対してのみ行われるべき」^{xxvi}と勧告するのは、被ばくを強いられた事故被害者の健康権への侵害です。

ICRPの被災地での活動は国・東電の加害責任を被害者の「自己責任」にすり替える欺瞞

附属書Bでは「地方自治体及び政府当局によってあらゆる防護措置が講じられたにも関わらず、…放射線被ばくに対する継続的懸念が、被災地の福祉やQOLに多大な悪影響を及ぼした。」^{xxvii}として、そのような状況の下での「ICRPのダイアログ」「ステイクホルダー間の議論」「専門知識の共有プロセス」「自発的防衛措置」を高く評価し、「放射線防護文化」の発展を促しています。しかし、このようなICRPの被災地での活動は、事故を起こした国や原子力産業の責任を個々の被害者の「自己責任」にすり替える欺瞞です。重大事故をもたらした原発推進政策への反省もなく、被ばく被害を過小評価する「専門知識」を普及させることは、市民や労働者にとっての本当の意味での「放射線防護」には繋がりません。そのようなICRPの姿勢そのものに、被災地の人々は強い不信感を抱いていることを知るべきです。

以上、ドラフトが含む多くの問題点の全てを詳細に挙げることはこのコメントではしませんが、本ドラフトは、被害者の人権を守る立場に立った、真の「放射線防護」と言えるものではなく、その全てを撤回すべきです。

i 「緊急時被ばく状況における人々の防護のための委員会勧告の適用」(ICRP刊行物,2009年)

ii 「原子力事故または放射線緊急事態後の長期汚染領域に居住する人々の防護に対する委員会勧告の適用」(ICRP刊行物,2010年)

iii 例えば、事故後、日本政府は「年間20ミリシーベルト」以上の追加被ばくが推定される地域にのみ避難指示を出し、それ以下の被ばく量が地域からの避難は公には認めず「自主避難」としました。一年後には、「年間20ミリシーベルト以下になれば帰還できる」として帰還促進策を打ち出し、帰還しない住民への支援が次第に打ち切られました。事故直後に学校の校庭の除染を行うかどうかの判断も、当初は「年間20ミリシーベルト」が基準とされました。(親や支援運動の反対で、文部科学省は後に基準を「年間1ミリシーベルト」へ修正しました。)汚染地域での除染は、「年間追加被ばく線量が20ミリシーベルト以上の地域を段階的かつ迅速に縮小することを目指す」として、「年間1ミリシーベルト

以下」は「長期目標」とされてしまいました。(「除染に関する緊急実施基本方針」2011年8月26日、原子力災害本部)
「少なくとも年1ミリシーベルト以上の被ばくをする地域には『子供被災者支援法』の適用をすべきだ」との被害者の要求を、政府は受け入れようとしていません。(「東京電力原子力事故により被災した子どもをはじめとする住民等の生活を守り支えるための被災者の生活支援等に関する施策の推進に関する法律」2012年6月27日)

iv ドラフト(42)～(83) 2.3 人と環境を守るための原則

v ICRP は Publication 26(1977 年勧告)で、「行為の正当化」、「防護の最適化」(ALARA の原則)、「線量限度」を「線量制限体系」の3原則として導入した。その後、Publication 60(1990 年勧告)で「放射線防護体系」に拡張された。

vi Publication 103, 総括(o)

vii 上に同じ

viii Publication 60, (223)

ix Publication 63「放射線緊急時における公衆の防護のために介入に関する諸原則」, 82「長期放射線被ばく状況における公衆の防護」, 等

x 「2007 年勧告」では、原発の通常運転時(計画被ばく)の「線量限度」が「一般市民に対して年間1mSv、労働者に対して年間20mSv(5年間の平均)」であるのを、重大事故の緊急時には「参考レベル」に置き換えて一挙に引き上げ、「一般市民に対して年間100mSv まで」「労働者に対し、緊急救助活動では1000 または 500mSv、他者への利益が救命者のリスクを上回る場合は、情報を知らされた志願者について線量制限なし」とすることを勧告した。そして「事故収束後に線源がコントロール」されれば、「一般市民に対して、年間1～20mSv の範囲」とし、通常運転時の「年間1mSv」は「長期目標」として棚上げした。

xi 本ドラフト改訂作業グループの議長は甲斐倫明氏(放射線審議会委員)、副議長は本間俊充氏(原子力規制、放射線防護企画課 放射線防護技術調整官)。

xii Publication 111 (50)

xiii ドラフト(80),

xiv ドラフト (表 6.1)

xv 「ICRP1990 年勧告の国内制度等への取入れについての意見具申」(1998 年6月,放射線審議会)には、「公衆の被ばくに関する限度は、実効線量については年1mSv、組織に対する線量限度については、眼の水晶体に対する線量限度を年15mSv、皮膚に対する線量限度を年50mSv とし、これを規制体系の中で担保することが適当である。このためには、施設周辺の線量、排気・排水の濃度等のうちから、適切な種類の量を規制することにより、当該線量限度が担保できるようにすべきである。」と記載されている。

xvi ドラフト (65) (102)(198)

xvii ドラフト 2.2.大規模原発事故の影響

xviii ドラフト EXECUTIVE SUMMERY (n), 本文(222)

xix ドラフト(225)

xx 100mSv 以下の健康影響や DDREF=1 を示す以下の最近の疫学調査の論文は引用されていない。

1. Ozasa, et al., Studies of the Mortality of Atomic Bomb Survivors, Report 14, 1950-2003: An Overview of Cancer and Noncancer Disease, Radiation Research, 177(3), 229-243, 2012.
2. Richardson, et al., Risk of cancer from occupational exposure to ionising radiation: retrospective cohort study of workers in France, the United Kingdom, and the United States (INWORKS), [BMJ](#), 2015 Oct 20;351:h5359. doi: 10.1136/bmj.h5359.
3. Laurand, et al., Ionising radiation and risk of death from leukaemia and lymphoma in radiation-monitored workers (INWORKS): an international cohort study, [Lancet Haematol](#), 2015 Jul;2(7):e276-e281.
4. Pearce, et al., Radiation exposure from CT scans in childhood and subsequent risk of leukaemia and brain tumours: a retrospective cohort study. Lancet. 380(9840):499-505, 2012.
5. Mathews, Cancer risk in 680,000 people exposed to computed tomography scans in childhood or adolescence: data linkage study of 11 million Australians. 346:f2360, 2013.

xxi ドラフト (22)

xxii ドラフト(B42)

xxiii ドラフト(A17)

xxiv Tokonami S, et al., Thyroid doses for evacuees from the Fukushima nuclear accident., Sci Rep. 2012;2:507. doi: 10.1038/srep00507. Epub 2012 Jul 12.

xxv Kim, et al., Internal thyroid doses to Fukushima residents-estimation and issues remaining. J Radiat Res. Vol. 57, No. S1, pi118-i126, 2016 (空間線量が0.1 μ Sv/h 以上の場所で、しかも放射性ヨウ素の γ 線スペクトルを特定できない機器での測定を行ったのみ。)

xxvi ドラフト(201)

xxvii ドラフト(B36)

講演・交流の集い

マーシャル諸島から米核実験被害者次世代を迎えて

8月10日、西宮市立大学交流センターで上記の集いが「救援関西」など5団体の共催で開かれました。マーシャルからのゲスト、ラニ・クレマーさんとサマンサ・ハネルグさんのお二人は今年の原水禁世界大会に招へいされ、東京・広島・長崎で講演と交流を重ねてられました。マーシャルの方から直接お話を聞けることは滅多になく、せっかくの機会だからと、帰国前日の慌ただしい日程を縫って関西でも集いが開かれたものです。また竹峰誠一郎さん（明星大学准助教授）からマーシャル諸島での米核実験の社会・歴史的背景、広島・長崎の原爆投下との関係などにも解説していただきました。

竹峰さんは「マーシャル諸島の核実験と広島、長崎の原爆投下—相互のつながりを求めて」とのテーマで「日本は唯一の被爆国か」と問いかけ、広島・長崎とマーシャルはどう繋がっているのか考えてほしい、小さい島の遠い過去の話ではないと切り出しました。

マーシャル諸島での米の原水爆実験は1946年から1958年まで67回。広島型原爆の7200発分。1954年の水爆実験（ブラボー実験）で第5福竜丸なども被災した。これは日本にとっては「戦後の出来事」だが、マーシャルにとっては「戦後のグランドゼロ」。放射能汚染によって健康被害だけでなく文化や暮らしを奪われ「核の難民化」とされ忘れ去られた。また、新たな脅威として核廃棄物格納施設（ルニット・ドーム）の放射能漏れや地球温暖化による海面上昇という問題がある。アメリカ政府は1986年に補償金1.5億ドルで「完全決着」という立場で、わずかな補償しか行っていない。しかしその中で住民は生き抜き抵抗してきた。3月1日を「核被災追悼記念日」とし、負の遺産に対して「正義/公正」を求めている（「復興」という言葉は使わない）。等々。

ラニ・クレマーさんはNGO「マーシャル諸島—放射線被ばくへ人々の関心を高めるキャンペーン」（2015年設立）代表。核実験被害者の支援に取り組むと同時に核の「負の遺産」を世界中に知らせることにより二度と繰り返してはならないと訴えています。祖母から聞いた話として、第二次大戦中に日本の植民地となり、マーシャルの人々が戦争に巻き込まれたこと、その後、アメリカによって核実験場にされ、移住を強いられた体験を中心に訴えられました。

アメリカから遠く離れた太平洋上にあるという理由で核実験場にされた。土地は全てであり、アイデンティティであり、祖先から孫・子孫に引き継がれる大切なもの。土地を奪われたら、命を奪われたようなもの。祖母はビキニから移住させられ移住は3回にのぼる。移住先では食糧もなく、厳しい生活を強いられた。「ビキニに帰りたい、帰りたい」と言いながら亡くなった。ブラボー実験ではロンゲラップ環礁、ウトリック環礁だけでなく、400人住んでいたアイルック環礁にも「死の灰」が降った。飲み水は黄褐色に変色し、皮膚が焼けヒリヒリした住民もいた。等々。

サマンサ・ハネルグさんは同NGOのメンバー。28歳。主な関心は若い世代に今も続く核被害

を知らせることだそうです。

エニウェタック環礁のルニット・ドームは核実験でできたクレーターの上に作られ、43回の核実験による核廃棄物の捨て場になっている。その中にはプルトニウムも含まれている。岩礁はサンゴ礁からできているので廃棄物は漏れ続けている。放射能汚染は多くの島に及んでいるのに、アメリカが被害を認めているのは4つの環礁（ビキニ、エニウェタック、ロンゲラップ、ウトリック）だけ。補償額もあまりにも少ない。負の遺産に対する「正義」を求めている。等々。

（日本を訪れた印象について問われて）東京の第5福竜丸の展示館を訪れ、それまで知らなかった第5福竜丸のことを知った。展示館や広島市の平和資料館を訪れその重要性が分かった。マーシャルには核の資料館がなく、何らかの形で展示ができるようにしたい。また子どもたちが書いた絵を見て、核被害を若い世代が学ぶ方法のヒントにもなった。

マーシャル諸島は第二次世界大戦終了まで日本の植民地支配下におかれ、戦後はアメリカによる信託統治のもとで、核実験場にされました。13年の間に67回もの核実験が行われ、すべての環礁が放射能汚染され、人々は故郷を追われ健康被害にも苦しんでいます。しかし、放射能汚染は4つの環礁にしか認めず、人々をモルモット扱いし、被害の実態調査や治療は行わず、補償は極めてわずかな額で解決済みとし放置してきたアメリカ政府。第5福竜丸のこと以外はあまり知りません



右からサマンサ・ハネルグさん、ラニ・クレマーさん、竹峰さん（8月5日 原水禁広島大会）

でしたが、核開発は差別と抑圧の上に成り立っているということ、そして核汚染は長期にわたり、子や孫以降の世代にも大きな「負の遺産」になるということを改めて教えられました。とてつもない不条理を押し付けられているにもかかわらず、一見陽気で気さくなお二人。お二人の若さが眩しくもありました。交流し、知り合うことの大切もまた改めて認識させられました。（いのまた）

（ラニ・クレマーさん、サマンサ・ハネルグさんのお話は「救援関西」のホームページにアップする予定です。詳しくはそちらをご覧ください。）

カンパ・会費の納入ありがとうございました！

(2019.6.20~2019.10.29)

山崎ひろみ 田中道子 服部賢治 田川克孝 田坂富士男 碧海宏 小副川久代 即得寺
馬庭京子 岩瀧悦子 岩部始 稲田みどり 畑中宏子 藤岡正雄 梅原桂子 富田洋香
山下晴美 畑章夫 林みどり 松田光代 中沢浩二 折口晴夫 中山一郎 康由美 木村英子
川邊比呂子 染木富美代 宗泉寺 旦保立子 原発の危険性を考える宝塚の会 田中章子
福岡いさ子 ダンスコアポシブル 佐藤ちい子 長沢由美 振津かつみ 猪又雅子

(順不同・敬称略)

カンパ・会費納入のお願い

保養キャンプへの支援（クラスノポリエから「ノボ・キャンプ」への参加、フクシマの子どもたちの参加する「ゴーク」への協力）を含め、ご協力・ご支援を本当にありがとうございました。また、今現在、事務局のメンバーがロシア・ベラルーシを訪れ、支援と交流を深めています。どうぞ、本文をご覧ください。これらの活動も皆さまの支援・ご協力の賜物です。心から感謝いたします。

これからも活動を続けていくために、重ねてのお願いで心苦しいのですが、カンパ・会費の納入をどうぞよろしくお願いいたします。

なお、全員に振込用紙を同封させていただいております。すでに納入済みの方は、なにとぞご容赦くださいませ。



ニュース発行:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局

連絡先:〒591-8021 堺市北区新金岡町 1-3-15-102 猪又方

Tel : 072-253-4644

e-mail: cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp

郵便振替:00910-2-32752

口座名:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西